





春部目録

春の氣の白候養生の法等十九丁三首

春風

△東風

春

△春雲

△暉日

△春三丁

春

△春月

△春夜

△春朝

春

△春夕

△春奥

△春望

春

△春山

△春野

△春郊

春

△春海

△春川

春

△春雨

△霞

春

△春の心

△長閑

春

△水ぬき

△春の雑

此部は春三月小ころ色々
乃雑事なり

△佐保姫

春

△木地爐

△東宮

春

△霞洞

△雙調

春天の春
春養生

△春の心

△草木

春の部をいふ
正月小用ひて



△柳	△芥菜	△波陵菜	△家菜	△山葵	△三葉芹	△海苔類	△石蓴	△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春
△芥菜	△波陵菜	△家菜	△山葵	△三葉芹	△海苔類	△石蓴	△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀	△鶯
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春
△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀	△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀	△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春
△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀	△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀	△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春
△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀	△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀	△鶯	△百子鳥	△鶯	△雲雀
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春

春之部

△此印あるは春三月より季入

春時令

此部より春三月ふりなる季の物をのす

春風

東風の春吹風ののどろみしてあつらるるのあり

春風の地下より吹上り地中の生理を發し、曠野青く是春の應なり○

巳卯の風その其年大風あり○五月西春へ南小秋へ北の風も

東風と雨つらとまはしとあつらるる哥は俗説といふとよりとどろ

あり春へ木より南へ火かり南風の時節の氣より相生とる

方の風へ雨とる方角より時節の氣と生れ晴北の水春

い木より水生木と生とるなり北風よけの暗きり尤西北の風と

乾風といふ四季とり小暗きり東此の風へ常は雨にたりといふ

春目録終

東北より北風して晴多し以て
風とまじりて常は晴とほり
とあるゆへ未申にさき羊頭と
つて雨はかるあり

哥拾遺 躬恒

吹風とまじりて梅の花
らりらつて香をまきりけり

同 春風不分処 後京極

おしめては風のまをむらさき
君が代よりまきりけり

詞胡糸。多あり。まむら。

非春風や三條のねを清くする 鬼貫

詩 春風 五字對句

煙花宜落日 春風開紫閣
絲管醉春風 大樂下朱樓

詩 春風七字對句 詩礎

只言啼鳥堪求侶 揺春風
無那春風欲送行 野外昏

春風夜動蘿衣薄 度春風
芳樹朝催玉管新 逐春風

霽日滿江寒漏靜 動陽春
春風遠閣白蘋生 待落梅

寒雨送行千里外 任好風
東風沉醉百花前 舞東風

詩 春風詞 高遠

明月斷魂清露平 魚歸路

春風

春風

春風

春風

緑迢々 此二句春月ノ對句ニ出ス 莫遣

頭如雪 頭雪ノ如クナルヤウニキ用心アリ 縱得春風亦不消 年ヲ

頭ノ雪ハ春風ニモキヘサルゾ

春雲 風ト同一西風吹ク 又降晴とあり事風の方角と

同ト西南ト東ト行ト出雲ト

り暗き東ト北ト西ト行ト

入雲ト雨ト或ハ東南

東北ト雨ト西南

西南ト出雲ト暗ト西南

春天 △春の空ハ

碧落三天外 山川乱雲日

黃圖四海中 樓閣入烟霄

天晴官柳暗長春 兼煙霞

山河香映春雲下 拂春雲

城闕參差晚樹中 洞天

仙宮下

詩 春天七字對句

詩 春天五字對句 同上

桂林山中佳日長 ケイリサンチウカジンナガシ

春風自信牙槽動 ハルカゼニシヨウカサノキ

遲日徐看錦纜牽 チビツヤウケンキンランケン

糸遊 イトユ

春の日のくろみ時空と ハルノヒノクロミトキウ

春の糸在紫雲 ハルノイトイシロクモ

春月 ハルツキ

新古今 ニウキン

夫木 春山月 ウキノハルヤマツキ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

同 ドウ

風小月ひつゝも花の香とてよふ

詞 春の曙。山の曙。春の夜。春の朝。

のつとに雲のあまき。ゆふ。それらに

非 春の夜やけり人かきみ新や

狂 人月まとうくくも春の朝

かろ月夜ふとくくも春の朝

春朝 藤原家隆

詞 春の曙。山の曙。春の夜。春の朝。

の朝。約さよふん。好まされ。物毎

春の夜。未の朝。ふかき心。柳の色

非 朝の月と花の香も春の朝

詩 春朝七字對句 詩礎

華堂翠幕春風至 曙光寒

繡閣金屏曙色開 送曉鶯

春浮玉藻寒初海 月沫収

露拂金莖曙欲分 入晨遊

詩 春曉ノ詞 孟浩然

春眠不覺曉處處聞啼鳥 春ハ

多キユヘ夜ノ明ルヲ知ラス鳥ノ

啼クニフトオトロキ目サムルゾ

夜 來風雨聲花落知多少 夕雨風

春夕 春の夕ぐれといふや

詞 春の夕ぐれといふや

百子春の聲のどかて遠をり

詞 夕ぐれ。夕ぐれ。夕ぐれ。夕ぐれ。

夕ぐれ。夕ぐれ。夕ぐれ。夕ぐれ。

連 梅の香は春の夜をり 不知

非 春の夜やけり人かきみ新や

狂 春の夕ぐれといふや

のつとに雲のあまき。ゆふ。それらに

詩 春夕七字對句 詩礎

詩 春夕七字對句 詩礎

春 晴令 春外 春望 春七

緑水殘霞催席散 隔暮雲

畫樓初月待人歸 夕陽遲

小苑迴廊春寂々 散餘暉

浴鳥歸鷺晚微々 目覺閑

春興 春野山と遊びて興あり

新古今 家隆

あふぐらちこもちる流るる水

詞 梅愛柳 下流るる水さびび

春望 春のあまき海川野山も

夫木 羈中眺望 有家

ひうせいのべの草なるもさる

詞 春の山川 かのうれを泳ぎたる

詩 春望五字對句 同上

白雲回望谷 城闕千門晚

青靄入看無 山河四望春

詩 春望七字對句 詩礎

白蘋楚水三湘晚 樹中分

芳草秦城二月初 春色明

近郭乱山横 古渡景物滋

野莊喬木帶新煙 接人烟

詩 曲江春望 唐 盧綸

暮蒲翻葉柳交枝 暗上蓮舟

鳥不知 景曲江ハ禁中ニアル江辺尤

ゲリ高蒲モ葉サカヘテ夏チカウ春
モ末ニナリ采蓮ノ舟ヲ催スコロ
ニモナリサラニイダシク今モモハ更モ到無花最深處玉樓
金殿影參差花チリハテ冬見ル
モノハ金銀ヲカザリ
シ樓殿ノカタタガヒ
ナルカゲノミツ

詩 西亭春望 西亭六西宮向 王昌齡
宮女ノ居ル宮殿

日長風暖柳青青ホクガシク北雁歸飛入

管冥 春モ半スグルコロ雁ノヲカ
古サトニカヘラント雲井ニトウ

岳陽樓上聞吹笛能復春心滿洞

庭 笛ノ音ヲキクニツケテ
故卿ヲ慕フ心イト切

春山 春ハ州木もささえて山の
あきさかりる事さう

拾遺 忠岑

夫木 春山霞 家隆

依保羅の多にありて山をいど
けさもかきみれ夜をいかり

山家 深山不知春 藤原公重

雪きて外山の谷はうぐいさの
よりの里は春やつぐらん

詞 春のふさふさの傍をむ。遠山
くまじ。霧はあけ雲をまわり谷

けうくひも。春の夕霧。やまはせ
よりの山。とあり山。山もいぬ

非 地つきのささげのよれま 立
多奈もうとれい山をまれば紫柏

在 四方山の春の夜をいどりと
まのすくくわつらと常盤

春山五字對句 同上

緑野明朝日 花雜重々樹

青山澹晚煙 雪輕處處山

詩 春山と字對句 詩健

井轉輓轡千樹曉 滿春山

鎖開閭闔萬山春 隔暮雲

春 詩 春 春

春 詩 春 春

春 詩 春 春

遠山積翠橫海島 五嶺春
殘霞飛丹映江濱 花滿山

詩 春山詞 劉商

君去春山誰共遊 鳥啼花落水

空流 君カヘラバ花鳥ノ風景モモノ

サビシ 如今送別臨溪水他日相

思來水頭 今溪水ノアタリニテ別

辺ニ相思ヘトナリ

春野 哥 万葉春の小

我子才成を一つ一夜寐ふらり
ら。道乃也。みぢりそふ。
ひしく。たは海夜。れおる月。
かどが跡。又もくは。あこもえ。
沙更どり。かともみ。雲間。と

春々々々塔の乃きろく桶 黛山
俳 けつていぢくま乃交來山

詩 春野五字對句 同上

臺榭春光媚 野竹池亭氣

郊原遠樹平 春花澗谷香

詩 春野七字對句 詩礎

聽雞曉闕踈星白 落芳塘

走馬春光細柳黃 入平蕪

田夫就餉還依草 野外烟

野雉驚飛不過林 春色深

春郊 春の野乃事なり 隆信

春の野乃事なり 隆信

續古今 枋本人磨

春郊詞板粹

水遶江渠漸有聲氣融烟

塢晚來明水声キコヘ野辺モ春ノ氣令ユキ多ルツ

春海 春のけしきものぞろろ

四季百首 定家

詞 春けうも。霞たを引。どか

浪の花。さうさつうあを。霞と

春の浦く。四の海のどろ。

詩 春海五字對句 同上

月明三峽曉氣清連曙海

海深九江春雲白洗春湖

詩 春海七字對句 詩礎

山入白樓沙苑暮渡江春

潮生滄海野塘春遠春流

雲夢夕陽愁裏色染湖波

洞庭春浪坐來聲洞庭春

春川 川は梅櫻の水ふり
ろへすぐあふい花の

らりうろろる 体雪消て水ま
さうー体さど公をらりより

哥 夫木 公純

六田川岩の柳のさるれ棹
わくあまのる流ささるり

詞 春のさう。わのく霞ひ。云の
あけぼの。穠さえゆる。とくさ水。物
わささ。せりささる。なほのやまこ

非川をひと響も縁のまへと仙鶴

詩 春川七字對句 詩礎

樹色到京三百里 渡水人

河流歸漢幾千年 逐水平

湘潭雲盡暮山出 盡清流

巴蜀雪消春水來 弄晴川

春雨 春雨ハ音かくさめや
うふる物さいしきこ

哥 建長百首 良教

よよぬのさまびく名のま柳み
うけてささるく流れささるる

新後撰 庭春雨 大政大臣
世に捨る男のかくれ家のふるふ
まささるーのふをのまさと免

夫木 旅春雨 知家

旅夜ぬまてそ神よあささるり
を流さるらめさるるさるるさる

詞 柳のくも。志免れ。れや。ま
わく。それぬ。さぼる。かさく

らに。かさく。かたさる。か
そく。月夜家さるさる。このや春

二。まのさる。あひさうとー春
やむさ本。旅より海くさるも

いぬ。考ささ。ぬるともさる。花
と免さむ下さる。さる。○雲さる

あ。さるのさ。さる。ささる。風
西風。月さる。さる。さる。新は

春の霞。並かきつゝるこの霞のぼら
の霞（倭名）神うたは雨たれれり霞の
日ぐり（夜）雨の衆。夜。圍（樹）。
灯の光りも志ある。軒敷てこと。彩
れをみ。彩の系あり。彩の衆。木の下
を流。旅。旅衣。志ほり。並れをみる。
やまの春ぬ。旅の長ぬ。意。信人のさ
り。並ぬ。霞ことりる。涙を志る霞

（連）雲霞の如し山をむるこれ宗養

雲霞の如きは雲の竹葉かふ細巴

（俳）春の霞たそがれの玉侍宗水

春の霞やゆるぬ家ふるり桶来山

けあれたぬ人や家の夏其角

ききあてははらひまき見の髪十磨

（狂）かきつゝる嵐きあつ春れそら

さびしきまはらぬ中らうく走帆

詩 春雨五字對句 同上

野籬濃花發海暗三山雨

春帆細雨来花明五嶺春

霞段 △春霞 △初霞 △一のすも
△霞 洞 霞海 △霞海 △霞海 △霞海

△霞 網 △霞 網 △霞 網 △霞 網

△霞 衣 △霞 衣 △霞 衣 △霞 衣

△霞 袖 △霞 袖 △霞 袖 △霞 袖

△八重霞 △八重霞 △八重霞 △八重霞

△鐘 △鐘 △鐘 △鐘

△霞 関 △霞 関 △霞 関 △霞 関

右のすも霞のこと。春の時

空中おろりして曇るり如あり

とし本字の靄や或の蒙とか

ありそかかみと訓らあり

（直）四方の海は雲もあやか霞 宵柏

（俳）武蔵守今朝一の霞を無名氏

心雲のあつ清きやまうす立圃

松とあつ花（き）こむ霞もさ嵐雪

綱（い）はみはあり初うすも十磨

（哥）夫木

定家

みろの春れ霞乃立あはて

はらぬまきあつらひの白名

春の霞がよみのを山風み
よのよりの霞をさうりてぞけり

建保百首 海霞 全

かよひての霞もてゆへふとぞそれ
よよみよれとけすよの浦を

建曆哥合 山家霞 為家

谷のそねの霞の色あままふ
かしてやけやうのうらた

夫木 海辺霞 参議為相

くろく目のつるれきと波路を
かよみを出て帰るよふ

續古 朝霞 家隆

春の霞乃おむろ月夜たごころも
よの朝月もなほうらた

夫木 河辺霞 成茂

水とるまの柳乃やみどり
うらたのそね乃あま

建保哥合 野霞 順徳院

ひさしやなれうまうはと秋の
かうはそかきしものし

遠うら。霞火がまじ。霞ひ霞や。楯

くの煙ももらぬ。浦く霞ひ。関内
けうらうら。霞小をな。霞とあめ

諸人 森 森の枝もけり。風を霞

里の煙ももらぬ。里遠くかきむ。
我もむ里の霞。河沿のきうら

霞小む。霞の流。河柳をむ。岩原

うすむ。橋。霞をまらむ。霞ひかた
ゆら。霞小かきむ。霞て遠く川沿

日。長用ひくすむ。霞をまらむ。ゆき

とまらぬ。うらたをむ。うらり
えてぬ。雨。ゆら。霞も

多を霞。喜まきかきむ。花の枝と

かきむ。霞社中にむいなる柳。山本の
柳をむ。河柳をむ。霞ふる。風

なまらぬ。海。根の梅をむ。ま

枝。松。霞の中はむ。松原。松原の
松風をむ。松原をむ。松原。松原

をむ。松原。松原をむ。松原。松原

ぬ。竹。名の縁をむ。松原。松原

居所霞の窓。くはむ形。花ふく
かじ。霞む垣根。衣霞の衣。佐保
娘の衣。うさみの袖。旅群山のりす
とけさ。うさ。古里。花さ。む。初方
ふ。都。お。か。ら。と。無常。孫。辺。は。霞
山。は。霞。む。さ。の。戀。な。れ。ぬ。を。か
る。う。る。強。ち。る。有。の。枝。さ。む。さ。ふ
わ。う。と。た。ら。さ。る。そ。そ

⑨ 九を春の霞はあまの目も風
たうてまけのよりあり 女風

⑩ 詩は作る霞と今朝の哥
詠どる霞といちどう歌連俳母
詠して春の季は入ふの蒙とふ
そのみて霞と詠と春の比天

氣の増ふをいふ又詩ははる
霞は朝霞晚霞のふい今朝
ていあさやけ夕やけの事み
今いふかとの事みていさ

⑪ 是の詩はつるの事みあり
本朝俗は朝や夕や

けの事へ日のでるは東の方
赤けてきへるは早くきゆる
雨ふるを一面はあつた
二三日の内は雨ふるあり日
の入りて西赤く南ふる
の晴あり。かすの事委
くは本篇博物笈といふ書
物まのぶるゆへふ畧に

⑫ 霞五字對句 同上

霜空澄曉氣 聖藻無寒露
霞景堂芳春 仙杯落晚霞

⑬ 霞七字對句 詩礎

雲開日月臨青瑣 卷曙霞
風卷烟霞上紫微 晚霞多

カセニエンカノボルニヒニ
カケイカヤハラニラニ
カケイカヤハラニラニ
カケイカヤハラニラニ

クモヒラケテツツケツツノセニ
クモヒラケテツツケツツノセニ
クモヒラケテツツケツツノセニ
クモヒラケテツツケツツノセニ

カセニエンカノボルニヒニ
カケイカヤハラニラニ
カケイカヤハラニラニ
カケイカヤハラニラニ

春 時令 長閑 春十七

遠山積翠横海島 趨紫霞

殘霞飛丹映江湄 向晚霞

長閑 春暖温麗の春の日

天氣ほくく和暖ふりくる

をい麗も同じ心ゆく百花

咲乱きてうらりきと云心とゆめ

玉葉 永福明院内侍

をらこの花乃の初りもやえて

ゆつ花のうらりきと云心とゆめ

詞 夕日 三柳 法入 うらりき 眠胡蝶

春の氣とゆめひん

水ぬき 春の氣とゆめひん

水陰氣のゆめ冬はかきま

てゆめひんゆめひん

水暖七字對句 詩礎

旌旗日暖龍蛇動 居住閑

宮殿風微燕雀高 雲過暉

芳郊綠園春晴散 趣轉閑

後道離宮烟霧生 玉生烟

春雜 此部は春三月より 混雜の物とのす

佐保姫 春の造化の神也

天地の色とありさりとあり母

あづきさつかり袖下集に四季

の姫は歌あり佐保姫の若神の

にたれて代と身とまはりの心

⑤ 春の姫のまはりもまはり名も

あづきさつかり春のふり粉頃所

詞春の雨々の風夕を佐保姫

の産後夜まはりの神さまなるを

狂言姫の家作りと産後 宗俊

けさゆまとうの家のれみ 走帆

木地爐縁 数寄屋かこ

冬に炉小塗をりて用ひ春に木地を

用ひ春に自然とやそりふゆつと

塗がらそいかりり又 東宮

えぞうとら孤りりてあり

春 どうぞうとても春に東と主

宮 どうゆへ事たりいまご御即位

をさ親王の御 霞の洞 天子の

事と申と也 御位と

とづとせゆとと仙洞と申奉るその

御事たり季小用る霞の洞に仙

人の居所なる目 雙調 春の調子

出度たり奉るこ

物へ生とる其音に木音たり内裏小

て舞衆ある時春のよの調子をいざ

春小あひや 雪玉集

あひやとくんと世もやう

あひや荒田のまふありや 春

あひや 伊勢物語 月やあ

あひや 春あひや

あひや 後成卿百首よみぬ紙張の

あひや 春あひや

あひや 春あひや

あひや 春あひや

あひや 春あひや

あひや 春あひや

あひや 春あひや

あひや 春あひや

あひや 春あひや

あひや 春あひや

あひや 春あひや

あひや 春あひや

あひや 春あひや

春養生

素問曰く春三月、これを發陳と云ふ天地共發、生一萬物、以て榮ふ夜、ハリ、臥、早

起、庭にひるを歩、形とゆるやく、志を生ぜ、免よしとて殺す、是養生の道也

春天氣

春の初甲子晴、是天氣、氣は、雨ふれ

春中雨多し、此日、雨の事、あらず、春の物の、事多し、殊の風雨も、事多し、殊、小甲子の千支の始、此日の晴雨も、多し、春の南風、雨、降、續く、め、晴、山、の根、又、北、吹、上、日、和、ふ、雨、共、寒、く、て、四、五、日、の、内、雨、あり

春草木

此、春の草木、如、此、用、

柳

△楊、△川柳、△青柳、△青柳

柳

△川、△青柳、△青柳

名異

△金、△白、△点、△弱、△聖、△門、△柳

△王

△風、△風、△風

△根

△水、△草、△柳

△柳

△の、△の、△の

△春

△す、△き

◎ 万葉

人九

堀川百首 俊頼

文治百首

定家

遠くを眺みながら色ふちるまきか
まふはかこの庭乃ち成すは

夫木 岸柳 伊勢大輔

春柳のやみ寝子ふひく少ひ
さう近くこそちまわしけ

夫木 杜柳 匡房卿

うとてふまうとぞあふまうと
つとよりかふるま柳のり

建長十首 河柳 光俊

世はくやまかかままれの玉川の
はぢい柳 名こそあうぢ

建長百首 水柳 仲正

里を死後の河をゆく名西ふき
やづへとらうりかつくせよこら

夫木 水辺柳 家隆

立田川中まはるいあはれかゝるあ
色そえとくはま乃青柳

同 閑居柳 兼宗卿

我々のいりく柳うらなびく
とあご乃系いん人りま

詞 ぶびく 折をみてよるうら

野燈系柳 美草路まうとる
初金まゝあるま柳のほひは

河原の柳 川そい柳流にひるあ
ぬまてをさ。後のまにまゝ底ま

教をままままゝの柳 妙
とて教ふる。流ふるまを堤 堤乃

柳さ柳。さ柳 難まうたふま
ま。難のそい垣 かの柳 垣根乃

柳 庭庭柳 門の柳 たが柳 田
門 回ふるびく系 柳の系 青柳の系

梅根の子孫系 花田の系 風ふり
る。さうら。うらある。風風系ひ

から。柳の枝ふらる春風 柳はよる
ま風。色ふみま。風はまうら。風

はまうら 髪 柳の髪 風ふらる。み
らまの髪。おの髪 眉みまの眉の

眉見 柳の系 眉こり 眉こり
引眉の系 露系はぬく。ぬく

とひ。たうらうら。うらまらぬ

春の風はさかしく 飛花あびく

又後の春をゆく 烟ける柳。夕方の春

牙物のまをりたる 柳の系にぬきとめて

遠村 誰宿の柳の影。飛鳥の足振

風文て 雨にみまろく 故郷の春の

春の柳。池の柳。春の柳。柳の影。

ひく柳。川柳。春の柳。柳の影。

春の日の影をわたりし柳の影

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

柳の影をわたりし春の風宗祇

荇 (異名) 根白州 水菜 苦蕒 女菜 新撰

テ此家當ニ貴人ヲ出スベシ

然レテ涙ヲフカス 百尺 高煩

百尺 高煩

柳之 十圍 桓温北征シテ金城

桓温北征シテ金城

桓温北征シテ金城

桓温北征シテ金城

桓温北征シテ金城

桓温北征シテ金城

桓温北征シテ金城

桓温北征シテ金城

桓温北征シテ金城

桓温北征シテ金城

去ぬのふりてへてゆくすりハ
まじりつらんやせいのせり

詞 春日野。香浦の沢。法法。沢。小池
内。塩。系。昔のく月。燕。ぬるも。椿。芥

小芥。係。根。芥。差。せり。沢。の。芥。沢。あ
る。法。の。芥。根。の。男。少。法。く。と。名。菜

非。せり。つむ。と。こ。せ。酒。さ。や。か。具。葉
椿。り。く。ふ。ふ。ま。る。根。芥。が。龜。語

浮。の。浮。芥。梳。る。る。れ。か。其。角
う。か。ひ。や。線。小。の。芥。の。花。同

女。菜。芥。の。事。なり。一。説。よ。ハ
せり。の。外。別。ふ。名。ぐ。と

ふ。る。の。あ。る。と。い。説。あ。れ。も
七日。の。若。菜。七。種。十。二。種。と。も。せ

ア。い。あ。れ。も。多。く。の。名。目。か
是。と。い。て。も。時。に。せ。れ。異。名。あ。り。たり

① 未。嫁。の。女。り。ま。ぶ。れ。も。か。と。人。心
と。も。名。將。面。の。顔。畔。つ。く。は。く。異。芥

志。川。の。女。々。山。回。の。あ。く。は。ら。さ。ほ。む
若。神。を。始。り。け。る。こ。邪

薺。菜。冬。到。後。蕪。で。生。と。三。三。月
莖。と。か。い。ん。護。聖。州。と。云

薺。蒿。順。和。名。曰。ま。る。の。和。名
か。ん。ご。と。あり。夫。木

く。ふ。は。ま。て。若。男。の。お。た。た。り。を
那。之。の。あ。ま。菜。の。根。や。ま。り。ん

嫁。萩。薺。蒿。の。こ。と。う。非。れ
の。内。の。秘。を。説。き。は。ら。り。あ。り

と。と。正。負。右。ま。づ。か。を。く。れ。ど。め
そ。こ。名。色。々。説。あ。れ。三。島。同。物。あ。り

嫁。菜。鑑。見。勝。云。非。れ。も。こ。と
これ。あ。り。あ。ま。り。な。薺。菜

椿。玉。椿。椿。共。代。の。白。玉。椿。唐
海。石。榴。列。々。椿。伊。勢。椿。

二。階。椿。等。別。種。な。り。数。百。種。あり
○。山。茶。海。石。榴。櫻。椿。これ。ホ

皆。は。ま。さ。と。訓。と。尚。説。多。く
未。だ。後。編。あ。り。と。い

波。菘。菜。異。名。波。斯。州。赤。根。州
○。波。菘。正。月。小。擗。物。春。喰

穀精草

や州 栽屋艸三月の内田の中を生じ葉石

昔の草花小き丸じて白く光りて星のおろし 本は秋らん

秦椒の皮

△山椒皮ともく 山椒の木の中へ

雑菜摘

雑菜とむらうの季は 摘む春の諸の菜のこ

山葵

山中の水ちるれ果を生じ人 家も侍へ三月末三月前生じ

獨活

△葉獨活先づいといふ風をこふ獨活いふ名づく

○二説より二月の季とともるも 風いぬるを考ゆとともるも 糸桐

三葉芹

△三葉ともいふ正月末より二月前生じ七葉

喰ふ二説より正月小とる説もあり 又二月小とる説もあり可考

廣美の花乃句

わねる言葉え

苔脯

△海苔ともいふ海の中へ いろいろ種類あり次記を

青苔

乾苔ともいふ味辛くも 伊勢

神化苔

△あぬのりとも云色紫ふり 石の上へ生じざるものあり

於期苔

海中石の上へ生じても 其うら

浅草苔

△浅草 紀州津 多し

櫻苔

色は黄白櫻の花ごとく 三月の季とも

松苔

△松苔 雲州より 多く出る

青苔や湖こきり松割松 又艸

狂武系なる清草をい各のこ 信海

細ぬきて海上のうらや青苔や ころとさいふてやまんともする

鹿角草

鹿尾草。大味菜といふ 海中の生じ形鼠の尾の

如く色白(子)伊勢物語 業平朝臣 ありあけいびらね糸糸ゆるり

初きりのまの神木つのも
能まふまひの物あつじ其角

石蓴 若和布ともいふ。南海の
石まつく生を色青

海雲 海蓋ともいふ。其形乱
くさ糸のおと諸国

より出る岸和田并 對州より出る丸
より俗あまのひのぞくこと

種植 二月の季又正月の節
桐子 紫蘇 蒸菜 漆

移栽 正月移し栽むと上時
能生活する故わり北日過より

来月十日より迄の中より地氣
ハ月ハ隨てさへかり汝を見て

あふべし氣盛んる時木の精皆
枝葉にあり是を移し栽む其性

を破る移し植むと土を半分
入棒を以て土をつき堅くさへ

上まやりのる土を加へ地面より

二三寸高くしては土をさへさへ
高く置べくはうえて後半月や

ハ毎日水と洒ぐべし。○木を
移し栽む時ハ東西南北の道

木小はち置て穴をかつらうと
くいろく堀りて根のどを

らぬやうに栽べし大木を
鳥居木とたぐしそれ小は

つあげてたら根の折さ
さげやうにさへ

春生類 春の季さるれども如
此卯の二月ハ用也

鶯 本朝ハ唐土ハ鶯の如
ちらぶこととも梅柳

ともあひて乃 雅音ハ
唐土の鶯ハ大に本朝の鳩を有

身はをぐれて黄色なる鳥也黄
鳥ハ黄鸝ともいふ嘴と足の赤

羽は黒又日本のうぐいすハ
黄頭鳥と名付て別物也 説水

鶯(異名) 尚庚 鶯黃 楚雀 博黍

黃鳥 容鳥 谷鳥 黃公 百喜

黃鸝 黃鸝 會庚 花見鳥 句鳥

くわ鳥 經々鳥 歌々鳥 鳥きり

車 鶯は明なれりて 枝の 紹巴

非 鶯は 鶯と云ふ 余 和言 其角

鶯の 鶯の 何中 鶯 思貫

鶯の 初言 鶯 鶯 鶯 鶯

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

鶯の 鶯の 鶯の 鶯の 鶯の

宝治百首 朝鶯 為家

のねまど縁ぐるの竹はのねた
かゝらとせとやうぶひすたかく

金葉 山家鶯 撰政左大臣

谷乃鶯縁をのこもとわく
夫木 田家鶯 倭成

まひとが秋のそ縁を松くねま
ほごまふきとりの声くろ

同 浦鶯 家隆
鶯のまろふさるけが歌波うこ
うゝハ乃るまも嘆やけいさ

詞 鶯 本つさふうのりさあ
本あく百さけりそく鶯家
雪 鶯の本ほさあ雪の中はま瓜
まがしてあく谷谷は古巢谷の

戸ある軒 鶯の鶯 新鶯あまの
霞 霞の中 鶯小いさふ霞さるま
朝 朝のまのまど 鶯さうまなく
これのま 縁ぐるのね 鶯さるま

垣根さなるはさふ竹竹の縁さる竹
の小えさふういさ 初音くもさる
春 鶯はさる 暮春 鶯さるま
いさ 友とさる 友さる 梅 梅のま
柳 鶯 鶯はさる 鶯の月さる
曉 鶯く鶯 花さるま 鶯さるま
鶯 縁ぐるのま 鶯の縁はさる
鶯 今鶯 縁さる 鶯さる 鶯さる
狂 縁報でさるさるさるさる
わう 鶯さる 鶯さる 鶯さる 次良
梅 鶯はさる 鶯さる 鶯さる 鶯さる
口 鶯さる 鶯さる 鶯さる 鶯さる

詩 鶯五字對句 同上
魚 戲芙蓉水 騎擁軒裳客
鶯 啼楊柳風 鶯驚翰墨林
詩 鶯七字對句 詩 礎

林間花雜平陽舞 作春啼
谷裏鶯和弄玉蕭 始藏鶯

鶯さる 鶯さる 鶯さる 鶯さる
鶯さる 鶯さる 鶯さる 鶯さる
鶯さる 鶯さる 鶯さる 鶯さる
鶯さる 鶯さる 鶯さる 鶯さる

春山鶯啼修竹裏

轉黃鸝

仙家犬吠白雲間

送好音

詩鶯詞

唐鄭暗

欲轉聲猶波將飛羽未調

借便何處得遷喬

春雲薄々日輝々宮樹煙深隔

水飛

詩鶯詞

鄭谷

為餘歌繫仙籍麻姑乞與女真

衣

鶯之

故事

鶯校

秦女笙

恙兒笛

仙韶九成

金衣公子

鳥之嘯

百千鳥

春

諸鳥

水鳥

金衣

稱美

鳥

百千鳥

とつとく鶯の名とかけの書
ものをどいふと覺るう一頭

昭の説ありり、これ鳥或は鳥
の千声をどしても春さかへ

吉今百子をさへる春のおどに
わとあはれも我をふりり、あはれ

能河上柳の梅の刺 白魚の
百ちどり 其角

竹の軒とりて白魚の目とつね
きりて賣へ勢切り專出る

與鳥 形鳥より大黒色を撃と調ふ
似う雄の啼呼雌雨とよ

駒鳥 頭と左右ふりて走駒の
如く故ふ名づく春夏能啼

雲雀 日の暗る時高く上り
て鳴る日暗ると心と名づく

千鱈 たつたわいさるく諸國
に京師大坂等へ春へ

能 干すもまじく鱈のまじりて東
多く上りまじりて故春の季とす

入用字引集

いろは全一冊
此字引は世俗日々入用の文字
と撰らわつめ乃小用ひざる遠
き文字とまじりて故字とひく小
基とまじりて真の早刻とす

須為地

京燈

平雲本

ハ落偽

板也

文化元年甲子臘月發行

浪花

南多寶寺町心齋橋邊
堺屋新兵衛

同

北久太良町西丁目
河内屋新治郎

同

唐物屋西丁目
網屋茂兵衛

同

島甲丁目
益屋市良治

